

## 減る「本や」さん

昔から、まちの小さな「本や」さんに行くのが楽しみだった。本はそれほど多くはないが、立ち読みしながら、じっくり選ぶことができる。本を買わないで、立ち去ることも多かったが、まちの「本や」さんが急激に減っている。

「書店ゼロ自治体」が、全国の自治体・行政区の2割強を占めるという。人口減少、ネットや大型店の影響が大きい。急激に減る「本や」さんは、けっして過疎に悩む自治体だけではない。わが自宅周辺でも目にする現象だ。名古屋市の千種区、名東区あたりでも、ここ数年「本や」さんが姿を消しつつある。地下鉄「星ヶ丘」駅近くの書店は、ドラッグストアに変わった。その書店は東山駅近くに移転したが、半年ほど前に閉じた。地下鉄「一社」駅や「上社」駅、さらには終点「藤ヶ丘」駅近くの書店も数年前に閉店。写真の藤ヶ丘駅前の商店街にあった書店には、鉄道関係など興味ある本や雑誌も多く、地下鉄で行ったものだ。



朝日新聞8月25日「天声人語」は、「本や」さんをテーマにしていたので紹介する。

人との出会いと同じく、本との出会いにも偶然のおもしろさがある。目当ての本を探して歩く図書館でばったり。友人の本棚でばったり。そして本屋さんの店先で、手招きする本がある▼大きな書店でなく「本や」という雰囲気を持った小さな店が好きだと、詩人の長田弘さんが書いている。本の数は少ないけれど構わない。「わたしは『本や』に本を探しにゆくのではない。なんとなく本の顔をみにゆく」のだから▼小さい店だから、ほとんど全部の棚をのぞく。自分の関心の外にある本、予期しなかった本がある。とくに夜、静かな店で「まだ知らない仲の本たちと親密に話をするのは、いいものだ」。そして1冊を買う▼まちの小さな本屋は、とりわけ子どもたちにとって、知らない世界への入り口でもあった。作家の町田康さんが小中学生の頃を振り返って書いている。ひとり書店に行き、新しい文庫本を手にする事で「頭のなかにおいて、どんどん遠いところに行くようになったのである」▼そんな場所は残念ながら、減る一方のようだ。書店が地域に一つもない「書店ゼロ自治体」が増えていると記事にあった。自治体や行政区の2割を超えるという。消えてしまった店を思い起こした方もおられるか▼ネットで頼めば自宅に届く。車で大型店に行けば話題の新刊が手に取れる。まちの本屋が減る理由は、本好きであるほど思い当たるかもしれない。豊かな出会いの場とは何だろう。読書の秋を前に、考え込んでしまう。

(2017年9月2日)